



TITLE:

# 魏晋南北朝隋唐時代の皇太子( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

千田, 豊

---

CITATION:

千田, 豊. 魏晋南北朝隋唐時代の皇太子. 京都大学, 2019, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21871>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	千田 豊
論文題目	魏晋南北朝隋唐時代の皇太子		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本学位申請論文は、秦漢時代に成立した皇太子制度が、魏晋南北朝隋唐時代にどのように変化したのか、その変化の実態を史料に基づく実証的な手法により解明した論考である。</p> <p>序論では、中国における皇太子制度の概略について説明した上で、特に魏晋南北朝隋唐時代が皇太子制度上の過渡期にあたる重要な時代であるとして、研究対象とする理由を説明したのち、関連する主要な先行研究について紹介し、この時代が皇太子制度上の重要な転換点と見なされることを再確認する。</p> <p>第一章では、西晋時代の太子師傅が取り上げられる。太子師傅とは、皇太子を教導くことを職務とする官職で、早くも前漢時代に設置されたが、後漢になるとその存在が軽んじられ、設置されない時期すらあった。ところが、西晋では当初より制度が整備され、任官数も大幅に増えた。太子師傅は「名誉職」であり、任官者は別に本官を有していたが、名声ある士大夫が任命されることが多かった。それは、「不慧」と評された皇太子（司馬衷。のちの恵帝）への消極的な意見を封じるための措置であったとの解釈が示される。また、次代の皇太子（司馬遹）の太子師傅については、外戚楊駿の意向により朝廷に影響力のある人物が任命されたが、これには楊駿の二つの思惑、すなわち、彼らを朝廷から遠ざけようとする意図と、名士が皇太子を支持しているように見せかけようとする意図が交錯していた。そしてその背景には、輿論の存在が見逃せないとする。</p> <p>第二章では、皇太子が執り行う積奠儀礼について考察が加えられる。まず、魏晋から唐代までの積奠儀礼のあり方を通観し、その起源と変化が描写される。次いで、『大唐開元礼』に拠り積奠儀礼の内容についての分析がなされ、積奠が皇太子にとって国子学への入学儀礼であることが明かされる。さらに、唐代に見られる「齒冑の礼」について検討が加えられ、それが身分に関係なく専ら年齢により序列が決まる礼であること、宋代以降はかかる儀礼が見られなくなり、積奠も、担当官庁が儀礼を行うようになることが指摘される。</p> <p>第三章では、唐代における皇太子号（皇帝号の場合もある）の追贈について検討が加えられる。唐代は、皇太子にならなかった皇族に皇太子号が追贈されることが珍しくなかった。この理由について、従来、正面から検討が加えられることはなかったが、本章では、皇太子号追贈の各事例について逐一考察を加え、その理由について解明してゆく。その結果、廃位された皇太子に対する皇帝の憐憫の情から始められた皇太子号の追贈が、やがて皇太子になれなかった兄弟への友愛表現として行われるようになり、さらには功績に報いることを理由になされるようになったことが示される。そして、唐代における皇太子号の追贈は、最終的には、皇帝から臣下に対する贈官・贈爵とほぼ同様の基準でなされるようになり、ここに「皇太子位の官爵化」という特徴を見出し得ると結論づけている。</p> <p>第四章では、これも唐代に特徴的に見られる皇太子廟（太子廟）制度とその意義について考察が加えられる。唐代に皇太子が祀られるのは、前章で取り上げた皇太子号追贈と密接に関係している。太子廟は、遅くとも8世紀前半にはすでに置かれていたことが確認され、以後、太子廟を誰が祀るか（王朝が祀るのか、皇太子の子孫が私廟として祀るのか）、あるいは設置の当否が断続的に議論され、その存在は必ずしも安定的ではなかったが、唐末まで存続した。皇太子号を追贈された皇族を太子廟に祀ることは、皇帝自身が「悌</p>			

の徳、すなわち、兄弟に対する篤い友愛の情を有することを示すものであり、これを皇帝が強調しようとするとき、太子廟祭祀に対する王朝の関与の度合いも高まったとの見解が示される。

結論では、第一章から第四章までの内容がまとめられ、それらを踏まえて、魏晉南北朝隋唐時代における皇太子位の位置づけがその時代的特色とともに指摘される。すなわち、漢代においては、皇帝に近い人々（皇帝自身、皇后、外戚、宦官など）によって後継者が決められ、官僚がこれについて容喙することはなかった。ところが、魏晉以降、皇位継承をめぐる争いが目立つようになり、政権に関わる官僚の意見や議論を踏まえる必要が出てきた。従来は嫡長子であることが皇太子になるための有力な条件であったのが、次第に能力や実績が重んじられるようになった。そしてこうした傾向は、皇太子位を官爵に近い存在へと変えていった。皇太子の位置づけがこのように変化したことは、一般に宋代以降の特徴と指摘される「君主独裁制」——官僚組織の頂点に立つ皇帝が行政の全てを決裁するシステム——が、実は、魏晉南北朝から隋唐時代にかけて徐々に醸成されていったことを示唆している。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、皇帝制度とともに秦漢時代に成立した皇太子制度が、魏晉南北朝隋唐時代においてどのような変化を遂げたか、そしてその変化には如何なる歴史的意義があったのかを、文献史料を丹念に読み解く実証的な手法により明らかにした論考である。

従来、中国の皇帝制度に関する研究は、儀礼の観点から切り込んだ論考を中心に数多く存在するが、皇太子制度については、意外にも、これまで研究者の注目をさほど集めては来なかった。そして、数少ない先行研究についても、皇位継承に関連する事項に着目したものが大半を占め、本論文のように皇太子位そのものの歴史的位置づけの解明に挑んだ研究はまれであった。その意味において本論文は、従来の研究史における空白地帯に果敢に切り込んだ意欲作であると言い得る。

さて、本論文の成果の第一は、従来研究が手薄であった魏晉南北朝隋唐時代の皇太子位について、多面的な制度史的検討を加えたことである。

まず、第一章で扱った西晋時代の太子師傅については、従来、このことを主題とした先行研究が稀れであり、その意味において貴重な研究であると言える。このテーマがこれまで等閑視されてきたのは、このポストが名誉職にすぎず、現実政治において大した意味をもたないと思われ込んでいたからであろうが、本論文では、先行する時代(漢代)の太子師傅との比較から西晋時代の太子師傅に積極的な意義を見出し、その歴史的意義を解明することに成功している。すなわち、西晋時代の皇太子は必ずしも安定的な立場になかったが、皇帝(もしくは朝廷の有力者)は、名望ある士人をこの職に就任させることによって、輿論が皇太子を支持しているように見せかけようとしていたことを明らかにした。この背景には、当時、官僚は「九品官人法」——輿論に依拠した官吏登用制度を通じて仕官していたことがある。

第三章で考察された唐代における皇族への皇太子号(もしくは皇帝号)追贈に関する論考もまた、これまで注目されてこなかった問題に光をあてた斬新な研究である。皇太子は本来、次期皇帝予定者である。それゆえ、世継ぎではない皇族に対して、死後に皇太子号が追贈されるのは当然とはいいがたい出来事なのであるが、唐代ではこれが頻繁に行われている。こうした事象については、これまで気づかれてはいたものの、その原因や歴史的意義について正面から考究した論考は無かった。本論文は、唐代における皇太子号追贈の事例を逐一検討した上で、廃位された皇太子に対する皇帝の憐憫の情から始まった皇太子号追贈が、やがて皇太子になれなかった兄弟への友愛表現として行われるようになり、さらには功績に報いることを理由になされるようになったことを明らかにしている。そして、唐代における皇太子号追贈が、最終的には、皇帝から臣下に対する贈官・贈爵とほぼ同様の基準で行われるようになったことに、「皇太子位の官爵化」という特徴を見出している。こうした見解は、今後、皇太子制度研究、ひいては皇帝制度研究を進めてゆく上での重要な足がかりとなるものと思われる。

第四章で展開された、唐代における太子廟(皇太子廟)の歴史的意義をめぐる論考も、従来の儀礼研究の枠組みにはまらない斬新な研究であると言い得る。中国歴代王朝は、皇帝の祖先を「太廟(宗廟)」にて手厚く祀ったが、唐代では皇太子がそれとは別の廟において祀られた。従来、太廟制度については王朝の礼制との関連から数多の研究蓄積があるが、太子廟については、それが通時代的な存在ではないため、あまり注目されてこなかった。本論文では、太子廟の存在が皇太子号追贈と不可分の関係にあるとして注目し、唐代における盛衰、誰の責任の下に祭祀を行うかなど、制度の根幹に関わる事項を検討した。そして結論として、皇帝自身が「悌」の徳を臣下に示

そうとするとき、王朝の太子廟祭祀に対する関与も深まることを指摘している。こうした見解は、従来の儀礼研究の枠組みを超えた広い視野に立ってはじめて導き得るものと言えよう。

本論文の第二の成果は、従来、儀礼研究の立場から考察されることの多かった皇太子に関する諸制度について、その政治的意義を明らかにした点である。

第二章で取り上げられた積奠は、一般には「孔子を祀る典礼」と説明されるが、本論文では、それに先だって行われる皇太子による経書の講学にも注目し、検討を加えている。そして、魏晉・南朝時代では皇太子が積奠を主催しそこで講経を行ったのに対し、北朝から唐代では皇太子が積奠を行う点は同じであるが、講経は皇太子ではなく官僚が行うようになるという変化を見出している。また、『大唐開元礼』の積奠記事の分析から、唐代における積奠は、事実上、皇太子の国子学への入学儀礼であることが指摘される。百官も参加する積奠を皇太子が主催することは、彼が皇帝の後継者たるに相応しい人物であることを視覚的に彼らに示す点で重要であるとの結論は、従来になく斬新なものである。

以上のように、本学位申請論文は、魏晉南北朝隋唐時代の皇太子に関する諸制度について、史料の丹念な読解を基礎として多面的に分析することにより、その時代的特性を解明したものとして高く評価することができる。ただ、五代・宋代以降のいわゆる中国近世における皇太子制度との関係などについて言及されていないのは残念である。今後、更に視野を広げて研究に邁進することを期待するところである。しかし、本論文で指摘された事項はいずれも、この時代の皇太子制度を論ずる上で今後看過し得ぬものであることは間違いなく、本論文の学界への寄与は大きいと言えよう。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版慣行上の支障が無くなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年              月              日以降